

先人の知恵から

6

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

このシリーズを書き始めて7回目になった。「新明解 故事ことわざ辞典(三省堂)」やネット上のことわざ辞典などを見ながら、「今も昔も思うこと、心に留めるべきことは変わらないなあ」とあらためて思う。しかも英語でも同じような内容の諺があるところをみれば、万国共通ということだろう。

支援者として、保護者や子どもたちに伝えるために、或いは支援者自身のために、まだまだ紹介したい諺は沢山ある。今回は「い行」から下記の8つ。

- 命に過ぎたる宝なし
- 井の中の蛙大海を知らず
- 祈るより稼げ
- 今の情けは後の仇
- いらぬ物も三年経てば用に立つ
- 言わぬが花
- 因果応報
- 陰徳あれば陽報あり

<命に過ぎたる宝なし>

生命ほど大切な宝は、この世にないということ。「命に換える宝なし」ともいう。「命あっての物種」も同義。何事も命があつてこそ初めてできる。だから命にかかわる危険なことは避けよという戒め。

最近命が軽んじられている気がする。何よりも大切なのは命であろう。簡単に子どもを殺してしまう虐待、恋人や配偶者を殺してしまうDVや好きになった人を殺してしまうストーカー、子どもの自殺。無差別殺人などは言語道断。車の無謀運転や脱法ハーブの問題まで入れると、気持ちが重くなってしまう。誰かに命を奪われるのを如何にして避けるか。誘拐されて殺されてしまった事件もあった。これらについては、防ぎようもない場合もあるが、何とか我が子や我々が支援している子どもたち、その周辺の人たちが事件に巻き込まれないようにと祈るばかりである。ただ、我々が支援している人たちが加害者にならないように見守ったり気を付けたりすることは出来るかもしれない。

一方で、自ら命を絶ってしまうケースでは、その兆候、サインを見逃さないことに尽きる。

そして、どんなに辛いことがあっても、生きてさえいればきっと良い日も来る。いじめにあっている子、虐待されている子、DV被害を受けている母親や女子。逃げる勇気を持って、助けを求める勇気を持ってと我々支援者は声を掛け続け、見守り続ける。人の命より重いものは無いのだから。と伝え続けよう。

英語では・・・

While there is life, there is hope. (生きている限り望みはある。)

又は

He that fights and runs away may live to fight another day. (戦って逃げる者は生き延びて他日に又戦う機会がある。)

<井の中の蛙大海を知らず>

知識や見聞の狭いことの例え。また、自分だけの狭い知識や見解に囚われて、他に広い世界がある事を知らずに得意になって振る舞うたとえ。小さな井戸の中に住む蛙は大きな海がある事を知らないと言う事から世間知らず、独りよがり戒める時に用いられる。出典は荘子。

この諺は小さい頃度々聞いた。最近日本から出て、見聞を広めようとする子どもたちが減ってきているように感じている。ちょっと調べてみたら、全体的な日本人留学生は2004年(82934人)をピークに其の人数は下がり続けているし、高校生の留学をみても1992年の4487人が、2011年には3257人とこちらも下がっている今年4月に報告された高校生の留学に関する意識調査では、留学したいと思う生徒は42.3%留学したくない生徒が57.7%であり、留学したくない理由は、1位言葉の壁(約56%)2位経済的理由(約38%)3位勉強・友人関係の不安(約34%)4位魅力を感じない(約32%)5位帰国後の進路・学校生活の不安(約13%)そして6位親元を離れたくない

(8%)となっていた。筆者が中学生の頃は日本が嫌で嫌で堪らず、外国に行く事ばかりを考えていた。そして、高校に入ってから色々な留学システムを調べ、高校2年の時に1年間アメリカに留学した。この経験はとても素晴らしく、筆者を大きく成長させ、アメリカの良い所悪い所を学び、と同時にあれほど嫌だった日本の良さを学ぶ事が出来た。中に居ては分からない事を外から見ることによって初めて学べるのだと知った1年でもあった。

外にはもっと広い世界、知らない世界が沢山ある。ネット環境がいくら整っても、メディアでどれだけ様々な国の様子が紹介されて居ようと、実際に行ってみ聞きする事とは感覚が異なる。子どもたちにそのことを一所懸命伝えている。

同様に、我々支援者は、多少の知識で全てを知った気になり、偉そうに話をしてしまうことに気を付けねばならない。人はそれぞれ異なることを忘れて、十把一絡げで物を言っていないか？常に自戒しながら支援をして行きたいものである。

英語では・・・

He that stays in the valley shall never get over the hill. (谷の中にとどまるものは決して山を越える事は無い。)

<祈るより稼げ>

困難に出会った時、神仏にすがって祈るよりも、自らの努力によって運命を切り開けと言う教え。

困った時の神頼みという言葉もあって、人はつい神仏にすがったり、新興宗教にはまったり、占いやお守りに頼ったりする。他人に迷惑を掛けないのであれば、他人の勝手と言えるだろうが、宗教にはまることで、家族に迷惑を掛ける例も見かける。

先日も、ある宗教団体に両親が子どもを連れ、一戸建ての家も売り払い、全財産を寄付して入信した結果、子どもの一人は精神疾患に、もう一人は7年後に団体を飛び出し、苦労した上にシングルマザーとなった人に出会った。

両親が宗教にはまったことで、子どもを巻き添えにしても良いという事は無い。

宗教が悪いということではないが、信みただけでお腹がふくれるわけではない。少なくとも、子どもたちがいるのであれば、どんなに困っていても拜んだり祈ったりするだけではなく、生産的な何かをすべきだろう。小さくても一歩ずつ前に進んでいけば、何時か何らかの結果につながるし、振り返った時に何かを出来た自分を認められるだろう。英語では・・・

Wishes never can fill a sack. (願望だけでは麻袋は一杯にならない。)

<今の情けは後の仇>

一時の安易な同情は、後になってからかえって悪い結果になるということ。

支援者として気をつけたいことの一つが、支援することと同情することの違いである。

同情したくなる気持ちが湧くケースは幾らでもある。これでもかという程、傍から見て不幸の連続にあるようなケースもあるし、漸くこれからと思った時に、悪いことが起こってしまうケースもある。「よりも寄って何故この人ばかりに悪いことが重なるのか・・・。」とこの世に神も仏も無いのではと思うようなケースもある。

しかし、そこで「可哀そうに」とか「気の毒に」という思いを抱くことは、相手に対し失礼ではないかと常に気を付けるべきであろう。

支援者側が一段上の立場にいると「可哀そうに」という思いになりがちであるが、当事者にとっては、同情されることに侮蔑を感じたり、益々ご自身を低く見て卑屈になってしまったりすることに成りかねない。そんな気持ちの裏返しとして、攻撃されてしまうこともあるだろう。ケースが大変であればある程、陥りやすい落とし穴とも言えよう。

「こんなに酷い状況なのに、良くこの人たちは耐え忍び、頑張っているじゃないか」という思い、「同情」ではなく、むしろ「畏敬」の念の方が、ケースの強みを見つける上で役に立つ。

「同情」からスタートすると、自己満足になりやすく、場合によっては「仇」になったり、おかしい共依存関係になってしまうことさえある。ケースにとって本当に何が必要で、何が支援なのかというところを見誤らないよう、よくよく気をつけるために、この諺を心に留めておきたい。

<いらぬ物も三年経てば用に立つ>

今は不用品でも、いつか役に立つこともある。今必要ないからと言ってむやみに捨てるなという教え。

親を見て子は育つというが、筆者の母親は物を取っておく人であった。包装紙、箱、輪ゴム、袋を止める物など。その分家が片付かないということはあったかもしれない。そういう親を見てきて、筆者にも物を取っておく癖がある。子どもたちの絵や作品はもちろん、学校等で頂いた小さな賞状、夏休みの作品、記念になる物ばかりではなく、包装紙やリボン、しっかりした紙袋、もしかしたら何かに使えるかもと思えるものは何でも取っておく。

世の中では断捨利が広がり、余計なものは取っておかない主義の人も増えた。確かに、ごみになるようなものもあるかもしれないが、しばらく置いておいて、「ああ、これ使わないかな」と思って捨てた途端に「あ、あれがあったらよかったのに・・・。」と思うこともしばしばある。

毎年年末の大掃除で大方処分するのだが、この諺をみて、もう2年置いておいた方が良かったとあらためて思った。

何でも壊れたらすぐ捨ててしまう、服でもちょっとしたシミがついただけで捨ててしまう。布を再利用するとか、リフォームするとか、壊れても直して使えるものは使うなど、もっともっと物を大切に使うようにすれば、資源も無駄に減る事は無いのではと思うのだが、貧乏くさいと言われてしまうのだろうか？

箱一つとっても、色々な種類の箱を取っておくと、場所を取って困ることもあるか

もしれないが、何かと助かることもある。捨てる前にちょっと考えてみても良いのではないか？

英語では・・・

Keep a thing seven years and you'll find a use for it. (物は7年取っておけば使い道が出てくる。)

<言わぬが花>

あからさまに口に出して言ってしまふより、黙っている方が、かえって趣や値打ちがあるという事。また、余計なことは言わない方が差し障りが無くて良いという戒め。

余計なことを言って失敗した経験は誰でもあるだろう。一度口から出てしまった言葉はもう戻すことはできない。そうした失敗をして、その失敗をどう繕うかと思案することで、コミュニケーション能力が上がると思う。しかし、最近ではラインやメールなど、推敲してから送る事が出来、直接的な会話で失敗することが減っている。

そういう意味ではこの諺は死語なのかもしれない。

しかし今でも「つい言ってしまった」という事は聞かれる。

例えば、子ども社会ではグループ化が激しいが、AちゃんがBちゃんの悪口をCちゃんに言った時に、Cちゃんが「そうだね。」と同意をしてしまっただけで「Cちゃんがそう言っていた。」という話になる。人の悪口には賛同しないのが一番であるが、関係性を重んじるあまり同意してしまう。

最初に言ったのはAちゃんであったとしても、人の口伝えというものはいい加減である。余計な事は言わないだけでなく、他人の一言にも安易に賛同しないのが花ということにもなるだろう。

一方発達障がいの子どもが、思ったままを口にしてしまうために、周囲から攻撃されたり、嫌な顔をされたりして、その子本人や、その保護者が肩身の狭い思いをしているのを見かけることがある。

発達障がいの子どもの行動を修正するには、良い行動をとれた時に誉め、認めることが第一である。いつもであれば、ここでこんな風な言葉を言ってしまふのに、今日は言わなかった、そんな時が必ず来る。その日までは、言ってしまったことを窘め、相手が不快な思いをしたことを伝え、相手に謝ることを教えることを繰り返していく。根気のいる作業だが、大切である。

発達障がいの子どもたちに接していて感じるのだが、彼らの中には「諺大好き」という子が比較的多く存在する。もしそういう子に出会ったら、「諺」を伝えることで上手くいくこともあるので使ってみて欲しい。

英語では・・・

No wisdom to silence. (沈黙に勝る知恵は無い。)

<因果応報>

良い行為をした人には良い報いがあり、悪い行為をした人には悪い報いがあるということ。

この言葉は比較的悪い行為の方でつかわれることが多いと思う。悪いことをしたら、きっとその報いが来る。そして、その報いが来た時に「因果応報だね」などと使ったりしているのが一般的だろう。

筆者は、いじめを受けている子どもたちに対し時々この諺を紹介している。「何も悪いことをしていないのだから、堂々としていよう」と伝え、その際に「因果応報」を説明したりしている。

本当にいじめをしていた子が将来必ず嫌な思いをするかどうか保証は出来ないが、いじめていた子がいじめられる側に回ることは事実である。それを知っているからこそいじめを受けている子に話すときに説得力があるのだろう。

今苦しんでいる子どもの気持ちを少しでも楽にしてあげるために使える諺の二つ三つは用意しておけると良いと思っている。

この諺も、いじめ問題だけではなく、何かしら行動上の問題が見られた時には使いやすいのではないだろうか。

英語では・・・

Self do self have. (自分の行為は自分に帰ってくる。)

又は

As a man lives, so shall he die, as a tree falls, so shall it lie. (人は生きて来たからには死なねばならず、同様に、木は倒れたからにはそのまま横たわっていなければならない。)

<陰徳あれば陽報あり>

隠れた善行をする者には、必ずだれの目にもとまるような良い報いがあるということ。出典は淮南子。「陰徳有る者は、必ず陽報有り。陰行有る者は、必ず昭名有り。(人知れず得を積むものには必ずはっきりとした良い報いがあり、人知れず善行をする者には、必ず明らかな名誉が与えられるものだ)」より。

「因果応報」とも同意の使い方が出来るが、こちらは特に良い行動に対して使う。

スクールカウンセラーの仕事で小学校などに入っていると、掃除の場面などを見ることも多い。授業中より、掃除のとき、何か行事があった時などの方が子どもたちの生の姿を見られることもある。筆者は時間があると、よく学校の中を歩き回っている。子どもたちの生の姿をみかけるのだが、その中には、真面目に一生懸命掃除をして居る子と、おしゃべりばかりしている子、遊びながらやっている子、何もしない子、掃除当番である事すら忘れて帰ってしまった子も含め色々な子がいる。

真面目に一生懸命やっている子を見かけると、必ず声を掛けるようにしている。勉強が出来ればよいということでも、歌や体育が得意であれば良いということでもない。人それぞれの得意分野があって、それぞれ得意なところで輝けばよい。掃除が得意であるなら、掃除でピカールになれば良い。

きちんとやろうとしている子を邪魔したり、「さっさとやれよ。まだかよ」と詰っていたり、そんな子を見かけた時は思わず注意することもあるし、担任の先生に報告する場合もある。

問題の多くは先生が目が届かないところでおこる。学校に関わっている者として、少しでもお手伝いできればと思ってウロウロし、見えないところで行われている悪さを見つけたり、普段目立たない子が、人知れず頑張っているところを見つけあげようと思っている。

小さな、善い行い、良い変化に気付いてあげられる事、それは、どんな場合でも支援者に必要なことではないだろうか？

英語では・・・

He who lendeth to the poor, gets his interests from God. (貧しき人に貸す人は神より利益を得る。)

又は

He that sows good seed shall reap good corn. (良き種を撒く者は良い麦を収穫する。)

今回はここまで。

出典紹介

^{そうし}**莊子** 中国、戦国時代の思想家。道家思想

の中心人物。名は周、字は子休。莊子は尊称で「そうじ」ともいう。儒教の思想に反対し、人為を捨てて無為自然に帰ることを解いた。『**莊子**』(そうじ、そうし)は、**莊子**(莊周)の著書とされる道家の文献。現存するテキストは、内篇七篇・外篇十五篇・雑篇十一篇の三十三篇で構成される。

^{えなんじ}**淮南子** 紀元前二世紀、前漢の武帝の初

期に成立した哲学書。編著者は、前漢の高祖 ^{りゅうほう}劉邦の孫である ^{わいなんおうりゅうあん}淮南王劉安。

無為自然の道家思想を中心とし、政治・軍事・天文・地理などに渡って諸学派の説を収めている。内編二十一巻、外編三十三巻があったとされるが、現存するのは内編二十一巻のみ。